

## 第二章 印歐語に於ける 叙法の歴史概観

7. 印歐祖語及び古語に於ける叙法. 吾々はこれより英語の持つ動詞の叙法に就いて、若干の研究を進めんとするものであるが、尙、吾々の足場を堅めんが爲、少しく印歐祖語乃至古語に於ける動詞の叙法と其の變遷過程に就いて一瞥を與へて置くのが便利である。一體印歐祖語に於いては、言語が極めて複雑であつて、これを動詞の叙法に就いて見るも頗る雜然たるものがあつたと認められるので、且は信憑すべき文書の遺存するもの無きが故に、固より明瞭には分らないが、先づ大體に於いて Indicative, Subjunctive, Optative, Injunctive, Imperative の五叙法があつたものゝ様である。その内、Imperative は、後代の言語に於いては或は Optative と接觸し、或は Indicative に屬する語形と雜糅して種々の變化を生じたが、元來は動詞の語幹をそのまま用ひた(例へば Gk. λέγε="say" の如く)もので、語形の區別に依つて表はさるゝ嚴密なる意味での叙法と稱すべきものではなかつたらしい。されば Giles も

The imperative is not properly a mood.

—*A Short Manual of Comparative Philology*, p. 502.

(命令法は本當は叙法ではない)

と言つて居る<sup>(1)</sup>。Injunctive は甚だ解釋に困難なるものながら、Imperative と密接なる關係にあつたものであるが、梵語に於いても最古の Rigveda (1500 B.C.?) には現はれるが降つて Brāhmanas の頃 (700 B.C.?) になると既に無くなつて居る<sup>(2)</sup>。又、Indicative は叙法發達の當初より、前述の如く吾々の認識し判斷するところを、そのままに事實として表示するものであつたと認められるのであるから、恐らくは深く問題とするに足らずとして一先づ差支へが無い<sup>(3)</sup>であらう。

8. **Subjunctive と Optative.** さすれば此處に問題となるものは Subjunctive 及び Optative の二つである。此二箇の叙法の原義は果して如何なるものであつたか。これは今尙、可なり深い疑問の雲に閉されて居

(1) The imperative has no modal affix.—Macdonell, *A Vedic Grammar for Students*, p. 118.

(2) The injunctive is identical in form with an unaugmented past tense.....It is very common in the Rigveda, but has almost disappeared from the Brāhmanas.—*ibid.*; Judged by its uses the injunctive probably represents a very primitive verbal form which originally expressed an action irrespective of tense or mood.....The general meaning of the injunctive expresses a desire, combining the senses of the subjunctive, the optative, and the imperative.—*ibid.*, pp. 349-50.

(3) 委しくは第四章参照。

る言つても良い問題であるが、獨逸の學者 Delbrück が 1871 年に *Syntaktische Forschungen*, Vol. I に於いて梵語と希臘語との比較研究に依つて發表した説は、今も多くの學者に受継がれて居る様に思はれる<sup>(1)</sup>ので、その結論を簡単に言へば、Subjunctive は “Will” を表はし、Optative は “Wish” を表はしたものと云ふことになる。彼はその後再三多少宛の補説を追加し、又、論述の變改を試みたものゝ、大體論としては原説を維持したのである。米國の學者 Goodwin は 1889 年 *Syntax of the Moods and the Tenses of the Greek Verb* に於いて、Delbrück とは違つた説を述べて、Subjunctive は元來「未來の時」を表はしたもので、それは希臘語に見られると云ひ、Optative も亦希臘語以前に於いては “weak future form” で *he may go; may he go* の如きものであつたと云つて居る。<sup>(2)</sup> 此説は本質論としての『Tense 則 Time 説』を否定する私にはさうしても其

(1) The meaning of the subjunctive is best brought out by contrasting its use with that of the optative. From this it appears that the fundamental sense of the subjunctive is *will*, while that of the optative is either *wish* or *possibility*.—Macdonell, *A Vedic Grammar for Students*, p. 352. (イタリツクスは引用者の使用に屬する)

(2) In the Homeric language the subjunctive (generally the aorist) may be used in independent sentences, with the force of a future indicative.....*Δίσομαι ἐς Ἅϊδαο καὶ ἐν νεκρῶσσι φαείνω*, *I will descend to Hades and shine among the dead*.—*Od.*, xii. 383. (Here the future *δίσομαι* and the subjunctive *φαείνω* do not differ in force), etc., etc.—Goodwin, *op. cit.*, p. 97.

儘では受入れ難いが、然し、かゝる説の出る所以は大に注目すべきもので、TenseとMoodとの間に存する相互關係に就いて多大の暗示を與ふるものたらざるを得ないであらう。それは兎に角、此兩叙法の原義が斯の如く明瞭を缺くのは、恐らくそこに深い理由の存することであらうと考へるが、それに關する論述は畢竟想像論の域を脱し得ないが故に、此處にそれを縷述することは避ける。然るにこゝに注意すべき一つの明確なる事實は、“Vedic Sanskrit”の如き最古の言語と希臘語のみが此兩叙法を有して居るだけで、“Classical Sanskrit”は Subjunctive を失ひ、又、拉丁語は或程度まで此兩語形を保有しては居るが、兩者の間の意義用法上の區別は全然これを喪失して居る事實である。此事實は抑も何を語るか。今、私は自己の根本論を上下することの危険を痛感するが故に、Delbrück 始め諸家の説を綜合して Giles の得たところに依り、今一應此兩叙法の意義と用途とを瞥見して見るだけに止めるが、それは次の如くに表示することが出来る。

- |             |   |   |
|-------------|---|---|
| Subjunctive | { | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. “Will” を表はす</li> <li>2. “Interrogation” に用ひられる</li> <li>3. “Vague Future” を表はす</li> </ol> |
|-------------|---|---|

- Optative {
1. “Wish” を表はす
  2. “Some Questions with *αι*” に用ひられる
  3. “Potential usage” を有する

以て此兩者が如何に相近似して、明確には區別し難い場合の多々あるべきことを思はしむるに充分であらう<sup>(1)</sup>。そこに多少場合の相違こそあれ、兩方共が疑問に用ひられ、兩方共が未來を表はす。一方は“Will”を表はし、一方は“Wish”を表はすと言つても、此二者は互に思想的に極めて相接した關係にあつて、共に Desire たる點に於いて一致し、只違ふところは“Wish”の方は、實現の可能不可能如何に拘はらず吾々の願望するところ全部を含むが、“Will”の方は、吾々にそれを實現せしむる能力のあることを前提とするか、若しくは豫想する位で、場合によつては屢區別し難いに違ひ無い。一方兩叙法の語形上の差異が甚だ大であつたのに、その意義上の區別が斯の如

(1) Cf. The uses of the Subj. and Opt. in independent Clauses have been shown to fall in each case into two main groups. In one set of meanings the Mood expresses desire on the part of the speaker; to this belong the Subj. of command and prohibition, and the Opt. of wish. In the other the Mood is a kind of Future; the Subj. being an emphatic or confident Future (like our Future with shall), the Opt. a softened Future, expressing expectation, or mere admission of possibility (the English *may or should*).—Monro, *A Grammar of the Homeric Dialect*, p. 287.

く甚だ明瞭を缺くのは頗る不思議の様でもあるが、これは古代語の常として、意義關係以上に語形の差別の複雑を來した原因が別に存在したのであるを考へて大過はあるまいと思はれる。勿論、その詳細なる説明は、今日よりも以上に緻密なる検討が古代語の種々の方面に盡された後でなければ、これを下し得ないが、兎に角後代の言語に於いて此兩叙法の並立が無くなつた事實は、最古の梵語と希臘語とに於いて此兩者が並立しつつも、然も、その間の意義職能上の差異が不明確であるといふ事實と共に、此兩者が頗る相錯綜したものであつて、兩者並用時代の人々にも充分に兩者間の區別が意識せられなかつた程度のものであつたことを思はしめる。佛蘭西の學者 Bréal の説くところ<sup>(1)</sup>に依れば、印歐語の最も古い時代には、夫々“commandement”(=commandment)及び“accomplissement”(=accomplishment)を表はす二つの叙法があつただけで、前者は「命令」・「願望」・「祈願」等の意を表はすに用ひられ、後者は「事實」の陳述に用ひらるゝものであつたといふのである。即ち氏の説を換言すれば、前者は Subjunctive に當り、後

(1) Cf. *Les Commencements du Verbe* (*Mémoires de la Société de Linguistique*, Vol. XI, pp. 268 ff.).

者は Indicative に相當する。而して氏の説に依れば所謂 Imperative, Subjunctive, 及び Optative の三叙法なるものは、皆、前者に屬する雜然たる語形の集團で同一の役目を有して居た (“avaient tous trois le même rôle”=had all three the same rôle or function) ののである。斯の如く同意若しくは等意の語形が種々存するのは、古代語に於いては珍しからざるころであると言つて居るし、私もそれを認める。私の見るころでは、此 Bréal の説は前述の諸説よりも更に大に傾聽すべきものであつて、今此處に問題とする Subjunctive 及び Optative の兩叙法は、そこに語形上複雑なる相違ありきはいへ、又、種々の用法ありきはいへ、その原義に於いてはその間に劃然たる區別の無かつたものを見るが正しい様に思はれる。而して、若し私の假説が許容せらるゝならば、その原義は想念的なもの一切を表はすにあつたので、それが用ひらるゝ場合の異同に應じて或は「命令」となり、或は「願望」となり、「祈願」もなり、又、「豫想」「想像」の類もなり、後代の言語に至つて漸次そこに若干の分業的事象を現するに至つたものに外ならないと思はれる。

### 第三章 英語の叙法

9. 種類. 英語の動詞が有する叙法は通常次の三つに分けられる。即ち

Indicative Mood

Subjunctive Mood

Imperative Mood

これである。或時代には Infinitive Mood さいふこゝが稱へられたが、元來不定詞なるものは一種の名詞であつて<sup>(1)</sup>、他の叙法と並列して數へらるべき動詞の語形ではない。只、Infinitive Clause と稱する一構文<sup>(2)</sup>に於いて、それは或程度まで動作又は状態の陳述をなし、従つて一種の準叙法 (quasi-Mood) とも見られ得るが、固より他の叙法と同列に論ぜらるべき性状のものではない。又、Participle も叙法の中に入

---

(1) Cf. *Better dwell in the midst of alarms/Than reign in this horrible place.*—Cowper, *Alexander Selkirk*. 又、to の附いた Infinitive は元來はその Dative Case に前置詞 to が添はつた句で古くは目的を表はしたものであるが、後にはそれすら名詞の役目を勤めるものとなつたことは周知の事實である。例へば *To err is human, to forgive divine.*—Pope, *An Essay on Criticism*, 522: *To be or not to be: that is the question..... To die, to sleep.*—Shakespeare, *Hamlet* III. i. 56-60. Cf. also: *Geben ist seliger als Nehmen* (Ger.=To give is more blessed than to take); *Vivre c'est veiller* (Fr.=To live is to observe).

(2) 拙著『英文法汎論』第廿二章参照。



れられたこともあるが、これは一種の形容詞であつて、只、近世英語の所謂 Absolute Clause<sup>(1)</sup> に於いては一種の陳述の役目を勤めることも考へられ得るが、尙、叙法の域内に入れらるべき確乎たる性質を有するものではない。又、或學者は條件文 (Conditional Sentence) の歸結 (Apodosis) に用ひらるゝ「should, would, could, might, etc. + 不定詞」なる組合せを Conditional Mood と稱へるが、それは本書第五章に示すが如く全く無用の類別である。それから古い頃の文法では屢 Potential Mood なるものが説かれたこともある。而して前述の Deutschbein 式の建前に依れば此綱目の立てられるのも無理は無いが、それは上述の如く言語としての英語そのものを分析して得られたものでないが故に私はこれを認めない。尤も、從來此叙法が説かれて來たのには全然これとは別箇の原因があつたのであるが、その迷妄に關しては Mason が充分にそれを解いて居るが故に今その一節を引くこゝ、

The so-called Potential Mood is a product of a series of blunders and misconceptions, and has been discarded by all the best authorities. 'I can write,' or 'I must write' is not a *mood* at all in the sense in which 'I write,' 'I should write,' or 'Write thou,' is a

(1) 同拙著第廿一章參照。

mood. If you take a subject (say 'John'), and a verb (say 'write'), when the Indicative, Subjunctive, or Imperative Mood is used, the *act of writing* is predicated of John in some manner, affirmatively or negatively, as matter of fact, as matter of conception, or as matter of volition. But if we say 'John can write,' or 'John must write' we predicate of John not *writing*, but the *ability* to write, or the *obligation* to write, which is totally different affair. Nobody thinks of giving the name 'Potential Mood' to such combinations as 'Scribere possum,' 'γράφειν δύναμαι,' 'Ich kann schreiben,' 'Je puis écrire.' Its retention in English grammar is anomalous and absurd.

—A *Shorter English Grammar*, p. 251.

(所謂可勢法なるものはいくつもの打ちつゞく誤謬と誤解の所産であつて、今では一流の權威者に棄てられたものである。I can write 又は I must write の如きは I write, I should write, Write thou の如きが叙法であるといふ場合に於いては叙法でない。若し一箇の主語、例へば John の如きを採り、これに配するに write の如き動詞を以てし、夫々 Indicative, Subjunctive, Imperative 等の叙法を用ひたならば「書く動作」が John に関して 肯定的 又は 否定的に、或は事實とし、或は想念上の事柄とし、或は意志の命ずるところとして陳述せらるゝのである。然るに、若し John can write, John must write 等と言はゞ、それは John に関して「書くこと」を述べるのではなく、その「能力」又は「義務」を述べることになるので、前のとは全然別事の陳述である。誰も拉丁語の Scribere possum (=I can write), 希臘語の γράφειν δύναμαι (同意)、獨逸語の Ich kann schreiben (同意)、佛蘭西語の Je puis écrire (同意)

等を可勢法と名付けようとはすまい。英文法に此名を留めるのは反理であり不條理である)

の如くである。此禱的叙法樹立の由來するところは此處に絮説する必要は無いと思ふが、簡単に言へば Potential Mood の設定は Priscian (fl. 500?) 始め昔の羅馬の文法家が、希臘の文法を摸倣して、拉丁語にも Modus Optativus と Modus Subiunctivus の二綱目を立て、同一語形の相異なる二用法を別箇の叙法としたことに端を發し、次で古い時代の英國の拉丁文法を説く人達が、拉丁語の Subiunctivus をその用途の差異に依つて Subjunctive と Potential とに分割し、最後に此方式を英語に無理強ひに當嵌めんとしたころから生じたもので、素より英語の本質に合ふべくもないものであつた。而して、英語に於いて斯の如き誤つた取扱ひを可能ならしめた一つの原因は、英語が古來の Subjunctive の語形と、その後に出來た「助動詞+不定詞」なる形式を有する所謂 Subjunctive-Equivalent との並列的用法、即ち例へば

He works hard so that his family *be* happy.

(彼は家族のものを幸福ならしめんとて一生懸命に働く)

He works hard so that his family *may be* happy.

(彼は家族のものを幸福にしようとて一生懸命に働く)

の如き二つの構文が存在したところにあるので、初めは此第一文に於けるが如き動詞を Subjunctive と呼び、第二文に於けるが如きを Potential と稱へたのであつたが、後には may, can, must 等が Indicative Mood として完全に各自の固有義を發揮して居る場合までも Potential Mood と名付け、かくて英文法上最大の誤とも言ふべき一叙法が出現したのである。實際、吾々が He can write; You may come; I must wait; I could not do it when I tried 等言ふ時、其 can, may, must, could は何れも Indicative Mood に屬するものであつて、これ等と不定詞との作る組合せは write, come, wait, do の叙法ではないのである。かくて英語の叙法として説くべきものは、正に本節の初めに掲げた三種類に歸する。吾々はこれより従來說かれて居るところに依り、その各々が如何なるものであるかの概説を試みるこゝ、しよう。

10. **Indicative Mood (叙實法).** Indicative といふ名は拉丁語の Indicativus から來たもので、“indicating”を意味する。即ち、その意味するところは、或動作なり状態なりをそれと指定して陳述するだけに止まるこゝいふので、極めて適當なる名稱とせられて居る。例へば Sonnenschein の如きも

The indicative proper is the most colourless of the moods, and from this point of view the name 'indicative' (=indicating) is very appropriate to it, just because it means so little. All the moods *indicate* something. And if we ask what particular meaning the indicative indicates, the answer is that it often indicates nothing more than the verbal activity in its barest outlines, without any *arrière pensée*.

—*The Soul of Grammar*, p. 67.

(本来の Indicative は叙法の中、最も色彩の無いものである。此見地よりすれば Indicative の名は、正にその意味するところの少きが故に此叙法に對する極めて適切なる名である。凡ての叙法は何れも何事かを指示する。而して若し Indicative は如何なる格別なる意味を指示するかと言ふならば、それに對する答は、それは屢何等の底意もなしに、只單に動詞活動<sup>(1)</sup>をばその最も赤裸なる輪廓に於いて指示する外、何物をも表はさないといふことになる)

と言つて居る。Jespersen は Sonnenschein が *A New English Grammar*, Pt. II, p. 61 に於いて “The indicative mood speaks of a matter of fact” と言つて居るのを捕へて、手痛き皮肉を交へて

But if I say “Twice four is seven” I use the indicative to express the opposite of a fact.

—*The Philosophy of Grammar*, p. 316.

(然し、若し Twice four is seven と言ふならば、事實に反することを言表はすのに Indicative を用ひて居

(1) 24 所引 Sonnenschein の説に對する註參照。

るのである)

を攻撃して居る。如何にも Sonnenschein の言は不用意ではある。然し、Jespersen の攻撃も、氏自からその次に

This objection might be called captious, for the meaning evidently is that the indicative is "used to represent something as a fact."

(此故障の申立は揚足取りと言はるゝかも知れない。蓋し原著者の意味は明かに Indicative は何事かを事實として表はすと言ふにあるからである)

を言つて居る様に學者の態度を逸脱したものゝ様で、私は寧ろ批評するこそを恥ぢる。氏が斯の如き事を言つたのは、或は次の

... yet even in that form the statement cannot be always maintained, cf. the frequent use of the indicative in conditional clauses: "if he is ill," and after wish: "I wish he wasn't ill."

(然しそんな風に言つて見ても、其説明は常に必しも支持されるわけには行かない。例へば條件文句に於いて If he is ill と言つたり、wish の次に使つて I wish he wasn't ill と言つたりすることも考へて見よ)

をいふこそを言はんが爲の前提として、氏が必要としたのであるかも知れないが、私をして遠慮無く言はしむれば、此故障は Jespersen の斜視でなければならぬ。これに關する私の考は後に言ふ (§§ 15, 34, 52 等参照) が、兎に角 Indicative Mood の職能はこれを他の叙

法の職能を對比して考へるに、何事かを事實界のものとして陳述するものであると言つて大過の無いものと思はれる。これ Sweet 初め多くの學者が此叙法を Fact Mood を名附け、又、私が大正六年以來『叙實法』<sup>(1)</sup>と稱へて居る所以である。尤も此和英兩名は心覚え式のものであつて、Sonnenschein の失言の如く事實を述べる叙法といふのではなく固より Jespersen の攻撃を受くべき筋合のものではない。尙、一先づは斯く説いて置くものゝ、それは從來の文法を出來得る限り尊重する意味でするのであつて、實は、その内容を巨細に検討するに、これまで Indicative Mood を名附くるものゝ中に入れられて居た諸語形を一經めにして、他の叙法に屬する諸語形を劃然區別することは困難なるのであるが、新しき理解を得る上に於いては、必しも古人の整理したところを根柢から破壊するに及ばないから、今は便宜に従つて此儘にして置く。内容の分析的吟味はこれを第四章に譲る。

11. Subjunctive Mood (叙想法). 此叙法に對する私の和名は『叙想法』である。それは前の Indicative Mood が Fact Mood であるのに對し、これが Thought Mood

(1) 以前には一般に『直說法』と稱へられて居たが私はこれを採らない。此事に関しては 213 參照。

ことも言ふべき性質のものであるといふ見地より附けた名であつて、「叙實法」なる名稱と共に私が大正六年に提唱し、以て今日に及んだところである。誠に、此叙法の意義職能は、後にその章に於いて述べる様に、種々類別的に考へられ得るが、然し、その凡てを總括して見るに、それは或事柄を事實として、なく(其事柄が事實であつても良いが)、只吾々の念頭に浮べらるゝ考、脳裡に構成せらるゝか、又は反映せらるゝ想として述べるものである。古い頃、我が國では「接續法」と稱へられたが、それは Subjunctive といふ原名の譯語としては可なり適當であるが、その適當であることが不幸にして此叙法の眞義を誤解せしむるにも適當であるが故に私は採らない。元來英語の Subjunctive なる名は、拉丁文法の Subiunctivus から來たもので、此拉丁名は元希臘文法の ὑποτακτικήの譯語であつたのである。然るに、誤解の種はその命名の當初に於いて播かれたので、ὑποτακτικήなる名稱は色々の意味に於いて不都合なものであつた。その一つの不都合は、昔の希臘の文法家が動詞の持つ諸の叙法を命名した時、他の諸叙法に對しては夫々の職能に依據して ἀποφατικὴ(=indicating); προστακτικὴ(=commanding); ἐδωτικὴ(=wishing) 等の名を與へなが



ら、獨り此叙法の場合には、その用ひらるゝ場所が從屬文句 (Subordinate Clause) の中に於いてゝあるといふ考(然も其考は誤である)から此名を與へたのであるが故に、命名の主義原則に一貫を缺くことである。若し、凡ての叙法が斯の如く用ひ場所の相違に依つて區別せられ得るものであつたならば、全體を其標準に基づいて分類命名することも、或はリンネの植物分類命名法の如く一方法を言ふべきであらうが、事實其様な區別の立てられない場合でもあり、且又、此種の分類命名は意義職能に依つてするのが當然であり、適當であると思はるゝが故に、此叙法の命名法は誠に當を得ないものであつた。羅馬の文法家は上記の Subiunctivus の外に、又 Coniunctivus といふ名を用ひたこともあるし、又獨逸文法でも Konjunktiv と稱へるが、何れの名稱も皆、此叙法は獨立文に用ひらるゝことが無いといふ全然誤つた考を根柢に置いて與へられた名であるから、これ等の名前は益不都合なものとなる。(1)尤も、名は一箇の符徴の様なも

---

(1) The term *Subjunctive*, like many other grammatical terms, is misleading. It is derived from the Latin *subiunctivus* as used by the Roman grammarians, and means 'proper to be subjoined' (i.e., used in subordinate clauses). It is clear that such a description of the Mood is wrong in two respects: many subordinate clauses do require the Subjunctive, but a greater number require the Indicative; on the other hand, the Subjunctive is required in many simple sentences and principal clauses.—Onions, *An Advanced English Syntax*, p. 114.

のに過ぎないが故に、吾々は今更斯の如き古い歴史を有する固定した名稱を變改せよとは言はない(和名の場合には未だ固定に至つて居なかつたから新名を提唱した)が、同時に吾々はそれが不當なる名であることを忘れず、飽くまでもその Thought Mood であることを記憶すべきで、吾々後進が絶大の敬意を捧ぐる我が國最大の英文法學者の如く

The Subjunctive Mood is so called, because the clause in which it is used, is *subjoined* as a condition or otherwise to the principal clause.

—*Practical English Grammar*, Vol. II, p. 110.

(Subjunctive Mood はその用ひらるゝ文句が條件としてか又は他の關係に於いて、主文に従接せらるゝが故にかく名附けられる)

The Subjunctive Mood is so called, because it is *always*<sup>(1)</sup> used in dependent clauses, which is *subjoined*, as a condition or otherwise, to the principal clause.

—*Studies in Mood and Tense*, p. 3.

(Subjunctive Mood は常に從屬文句に用ひられ、それは條件としてか又は他の關係に於いて主文に従接せらるゝが故に此名があるのである)

等と説いてはならない。名に誤まれて斯の如き謬想を抱くぞ

God bless you! (神の祝福御身にあれ)

(1) “always” のイタリツク化は引用者の責任である。尙、此第二文に於ける文法上の誤りは原本(明治三十五年版)誤植(?)のまゝである。

の如きを

May God bless you!

I pray that God may bless you.

まで持つて行かなければ説明がつかなくなる。上に引いた學者は、此場合に就いて

Here the Subjunctive apparently seems to be used independently, but it is really to be considered as a dependent clause with the principal clause understood, as is frequently the case in exclamation.

—*Studies in Mood and Tense*, p. 67.

(此場合 Subjunctive は一見獨立的に用ひられて居る様に見える。けれどもその實、それは感歎の場合に於いて屢見るが如く、主文が言外に了解さるゝ從屬文句と見るべきである)

を言つて居られる。此種の文が重複文 (Complex Sentence) で言表はされ得る様な事柄を簡潔に言つたものであると説くことは至極尤もであり、若し重複文を用ふれば此種の文の内容はその中の從屬文句となることも事實であるが、さればこそ古往今來獨立文であるこれ等の文を從屬文句なりと見ることは、言語の歴史上全然謂はれ無きことで、人を誤まる謬説を言はなければならぬ(尙、§19 參照)。若し此叙法が此學者の説くが如きものならば、更に

We *had* better consult the waiter.

—Dickens, *The Pickwick Papers*, V.

(給仕に聞いて見るが良からう)

You *had* better sit down now.

—Bennett, *The Grand Babylon Hotel*, IX.

(君坐るが良いでせう)

He *had* better not to speak to me, unless he is in love with gaol and gallows.

—Kingsley, *Westward Ho!*, VII.

(監獄と絞首臺が戀しければ兎も角、彼は此わたしには口を利かないが良からうよ)

Bid him go see the chaplain; it *were* best

He make his peace before he make his trial.

—Masefield, *Minnie Maylow's Story*.

(彼に牧師のところへ行けと言へ。試しをやるより先に心の惱みを無くして置くが最善であらうといふもの)

Upon which Cary, a clear-headed child, began to point out to him . . . how, in brief, he *had been* more accurate had he said not "Exactly," but "Rather."

—Rose Macaulay, *Keeping up Appearance*, II. i.

(さうするとケヤリーは、頭の良い子供で、手短かに言へば若し彼が「全く」と言はずに「むしろ」と言つたら一層正確であつたであらうといふことを指摘しはじめた)

等の如く主要文句 (Principal Clause) に用ひらるゝ数多き場合は如何に説くのであらうか(これ等に関しては §§71-4 参照)。兎に角、此叙法の動詞は、従屬文句に用ひらるゝここの多いのは事實であるけれども、獨立文又は主要文句に用ひらるゝここのも決して尠く

ないのであるから、今上記の理由に依つて Subjunctive なる名稱を襲用するとも、それは只の名こしてのこさであるこさを忘れてはならない。而して、此叙法の職能は、或事柄を、たこへそれが事實であつても、尙、これを事實こして、なく、吾々の想念に寫して見たものこして述べるものである<sup>(1)</sup> こさを牢記すべきである。今、試みに最近の文法書の説くこころを引いて見るこ、

The function of the English subjunctive is to represent something, not as an actual reality, but only as a desire, plan, demand, requirement, eventuality, conception, thought; sometimes with more or less hope of realization, or, in the case of a statement, with more or less belief; sometimes with little or no hope or faith. The subjunctive is also often used of actual facts, but it represents them as conceptions of the mind, general principles rather than as facts. . . . Thus, though the subjunctive has a number of distinct functions, they are all united in a higher unity—they all represent the action or state as a conception of the mind rather than as a reality.

—Curme, *Syntax*, pp. 290-1.

(英語の Subjunctive の職能は何事かを實際の事實として、なく、單に願望、計畫、要求、必要、可然、意想、思想として言表はすことにあるので、時には若

(1) 若し此私の言葉が不十分であるならば、例へば、§91 に於ける「should + 不定詞」の場合の説明等を参照せられたい。

干實現の希望を伴ひ、又、それが陳述である場合には、時に多少の差異はありとも若干の信念を伴ふこともあるが、又、時には殆んど希望も信念も伴はないこともある。Subjunctiveは又屢實際の事實に就いても用ひられる。然し、其場合、それは其事實を事實としてよりも寧ろ心の描くところとし、一般論として表示するものである...かくてSubjunctiveはいくつかの劃然たる職能を有するが、それ等は皆一層高き一致に於いて統括せられる。即ちそれ等は凡て動作又は状態を現實としてではなく、それよりも寧ろ概念として表はすものである)

の如くに言はれて居る。若しこれを定義さして見るならば、餘りに長きに過ぎ、凱切を缺く憾ありませらるゝかも知れないが、その代り可なり綿密に此叙法の特徴を説いたものと言ふべきである。(1)即ち此叙法はこれを叙實法と比較すれば、そこに著しき差異

(1) 試みに他の二三家の説を引いて置かう。In the Subjunctive Mood the action is not stated as a fact, though it may be one, but as a conception of the mind.—Peile, *A Primer of Philology*, p. 93; The Subjunctive Mood comprises those forms of a verb which are used when a statement, question, or supposition has relation to an event or state of things which is only *thought of*, and which is not treated by the speaker as *matter of fact*, independent of his thought about it.—Mason, *English Grammar and Analysis*, p. 67; The optative, sometimes called the subjunctive, is used to express an action or state simply as conceived by the mind. It is employed either in independent sentences or in subordinate clauses.—Cook, *First Book in Old English*, p. 103. この中で最後のは古代英語に関するものであるが、勿論これを近世乃至現代の英語に用ひて毫も不都合は無いのである。又“Optative”の名がSubjunctiveよりも主要名として用ひられて居ることの理由に關しては本節の末尾を見られたい。

の存するこゝが明かとなるので、彼が一種の客觀的陳述の役目を勤むるものであるのに對し、これは正しく主觀的陳述の具であるとも言ふべく、こゝに叙實法の用途が比較的單純であるのに反し、此叙法の用法が頗る複雑を極むる理由が存在するのである。斯く觀じ來れば、此叙法に關する吾々の認識は餘程正確に近くなるわけであるが、尙、飽くまでも正確を期せんが爲、世間一般に行はれて居るか、さなくとも不知不識の間に認容せられて居る様に思はれる今一つの謬見を吟味して置かう。それは此叙法が條件の意を寓するものであるといふ考方より來る謬見で、それは此叙法の歴史を説く上に重大なる支障を來して居る考である。こゝに少し古くはあるが、最も理論的なりとの稱ある Bain の説を引いて見よう。氏は不幸にして此叙法の職能を誤解し、引いては此叙法が近世の言語に於いて衰頽したこゝの原因に關して甚だしき辟論に陥つて居るのである。氏は曰ふ。

Some circumstances in the MANNER of an action have also been embodied in the changes made in the root verb. For example, when an action is stated not absolutely, but conditionally, the verb is differently modified, and a series of tenses is formed, for present, past, future, complete and incomplete, of the condi-

tional verb. This is the subjunctive MOOD, which exists in full force in the old languages, but is a mere remnant in ours. The machinery is too great for the occasion; we find that conditionality can be given by a conjunction—'if' or 'though'—and need not be repeated in the verb.—*A Companion to the Higher English Grammar*, pp. 164-5.

(動作の模様の中の若干の情況もまた根源動詞の受ける變化の中に具現せられた。例へば、或動作が絶対的でなく、條件的に述べらるゝ時、動詞は異つた形態に變ぜられ、こゝに條件動詞の完了及び未完了の現在・過去・未來に對する一連の時の形が造られる。これが Subjunctive Mood で、古代の諸國語に於いてはそれが完全に活動して居るが我が英語に於いては單に形骸を留めて居るに過ぎない。實はかゝる道具立は此場合大げさに過ぎるので、吾々は條件といふものは if 又は though といふ接續詞によつて表はされ得ることを知る。乃ち再びこれを動詞に繰返へす必要は無いのである)

此論は今尙、時々繰返へさるゝところであるが、遺憾ながらこれは全然言語界の事實に關する認識を誤り、某氏往年の言葉を借りて言はゞ事實を假造した議論を稱すべく、後進を惑はすこの甚だ大なるものである。Mason は此説を駁して、

This statement is wrong from the beginning to the end. It is (to start with) a mistake to speak of *conditionality* as a circumstance in the *manner* of an action. 'Ifs' and 'thoughts' mark relations of *thoughts*,



but not relations of actions or events. Our mental attitude with regard to an action or event is no part of the *manner* of the action itself. Again, the passage distinctly implies that in the old languages (Latin, for example) that set of verb forms called the Subjunctive Mood was regularly employed to express conditionality ('exists in full force'); or, in other words, that the Subjunctive regularly follows *si* in Latin. Nothing can be farther from the truth, as has been shown above. Further, it is said that *we* (in contrast to the Romans, Anglo-Saxons, Germans &c), having made the happy discovery that 'conditionality can be given by a conjunction,' save ourselves the trouble of repeating it in the verb. On this it is to be remarked that the Romans, &c., had already made this discovery, and were aware that conditionality (supposition or concession) was *altogether* expressed by the conjunction, and that when they used a Subjunctive Mood after the conjunction, it was not to do a second time what had been sufficiently done already, but to do something which no conjunction could effect—namely, show that the conditional statement had relation to matter of conception, and not to matter of fact.

—A *Shorter English Grammar*, p. 247, footnote.

(此説は徹頭徹尾誤りである。先づ第一に條件といふ事を動作の模様の中の情況とするのが抑も間違である。If や though の類は思想の關係を印附けるもので、動作や出來事の關係を表はすものではない。動作又は出來事に關する吾々の心的態度といふものは、決して動作そのものゝ模様の中に入るべきものでは

ない。それから此説には明かに古代語、例へば拉丁語等に於いては、Subjunctive Mood と呼ばるゝ一群の動詞が條件を表はす爲に、規則的に使はれて居たといふことが含まれて居る〔完全に活動して居る〕とある。即ち、語を換へて言ふと、拉丁語に於いては si の後には必ず Subjunctive が附くといふことになるが、これ何よりも大なる誤りであることは、本書で前に述べたところに依つて明かである。それから又、羅馬人や、アングロサクソン人や獨逸人等とは違つて、吾々英國人は、條件なるものが接續詞で言表はされ得るといふ都合の良い發見をなし、その結果、それを動詞に繰返へす勞を省くと言はれて居るが、これに關しては羅馬人その他も既に其發見を成したのであつて、彼等も條件といふものは、想像でも讓歩でも、全然接續詞で表はされるといふ事を知つて居たので、彼等が接續詞の次に Subjunctive Mood を用ひた場合には、既に十分に成された事を再度爲すが爲にしたのではなく、實は如何なる接續詞も成し遂げ得ない事、即ちその條件的陳述が想念上の事柄であつて、事實に關するものではないといふことを示す爲であつたのである、といふことが注意せられなければならない)

と言つて居るが Bain もこれには殆んご一言も無いであらう。蓋し、叙法の表はす區別は言者の見方・考方の區別であつて、動作又は状態の模様の區別ではなく、又、近世の英語に於いて、條件又は讓歩の文句にも叙實法の用ひらるゝことの多くなつて來たのは、決して斯の如き單純な、機械的な説明を以て解決せらるべきものでないを信じなければならぬか

らである。但、此點に關する私の考は第五章に於いてこれを述べるつもりであるが故に、此處には差控へて置く(主として §52 参照)。尙、希臘語に於いては Subjunctive Mood とは別に、Optative Mood と稱するものがあつたことは前述の通りであるが、英・佛・獨の諸語に於いては古來かゝる叙法の並列無く、只一つの語形群を以て、希臘語に於ける兩叙法の場合を蔽うて居たのであるから、その用途の差異に依つて種別を設くべきものではない。而して、此事が又、『叙想法』の如き極めて廣汎なる名稱を必要とする所以でもある。只、最後に一言注意して置きたい事は、凡て Teuton 語に於ける所謂 Subjunctive Mood は、これを語形の方面から見るに希臘語等の Optative Mood の系統に屬するもので、Subjunctive Mood の流を汲むものではないといふ事實で、これ前の脚註に引いた米國の學者 Cook 達が Optative なる名稱を用ふる所以である。

12. Imperative Mood (命令法). Imperative なる名は拉丁語の Imperativus から來たもので “commanding” を意味し、從來我が國語でも此叙法を『命令法』と呼んで來た。此叙法の表はすところは言者の意志に依つて他の行動を左右せんとする態度を示すことで、此

意味に於いて此叙法は Will Mood であるといふことが出来るが、若し命令なる語を極めて廣い意味に解すれば (§95 参照)、そこに大なる誤りの生じないものと思はれるが故に、吾々は依然舊名を踏襲するを以て妥當なりと考へ『命令法』を以て終始する。